

共同研究を終えて

濱田 耕 策

人文学、なかでも歴史学の共同研究が成功裡のうちに成果を収めたかどうかは、やがて研究者の間に評価が生まれるものである。まして、考古学ならず文献史学の、しかも日韓の間の歴史認識の齟齬と摩擦をほぐそうとする関心のなかで進められた関係史の研究となれば、克服してこそ将来の成功の条件となるであろういくつかの問題点に気付かれた。

それはまず、「水掛け論」に陥りそうな局面があったことを日韓の委員が相互に感じたであろうことである。その背景には隣国との関係史が近代の国際関係の概念で分析解釈され、それがために近代の日韓の関係史が古代の関係史に重なるかのように解釈されて印象を与え、また印象を受けてしまう傾向がしばしば現れている。隣国間関係史は日韓の間でのみならずとも文化の交流と侵攻の歴史が交差したのであるから、この古代の関係史を意識するしないに係わらず近代の歴史経験を経て論ずることの“危うさ”である。

私は古代の日韓関係史では今日概念では読み取ってしまうことが出来ない古代的な感覚とも言うべき判断や心象が関係史の当事者の内にはあったのではないかと思われるのである。この古代人の心象に立ち入ることは歴史研究者の姿勢としては慎むべきことであろうが、4～6世紀の古代日韓関係が日韓の対一ではなく、倭国対百済、倭国対加耶であり、その関係は百済、加耶、高句麗、新羅の相互の関係の展開と連鎖しつつ進展したのであり、その関係を担った古代人の心象は近代の関係史の概念をもってしては理解が十二分ではない面があるとうさえ思われるのである。人と物が朝鮮半島南部の多島海から島々を近くまた遠くに望みながら200余kmの海を渡り、またその逆にも日本列島から渡海した相互の意志と行動の源こそ日韓関係史の原点である。

次に、日韓のこれからの共同研究に向けても日韓相互に言えることであるが、関係史像を構築するには日本列島内、また朝鮮半島内での古代国家の形成過程の研究とその論点、そして成果を充分に組み入れて整合的に関係史を構築することが求められる。そこには近年めざましく進んだ日韓での考古学の研究成果とその問題点との整合的構築が求められるが、文献史学と考古学との協調は言うは易しいが、実のところ難しい協業である。

こうした問題点を孕みながらも古代日韓関係史のなかでは百済との関係史は注目すべき位置にある。4～6世紀の倭国と高句麗、新羅との関係は対立の関係に問題が集約されてこれまで研究されてきた。これとは異なって、倭国と百済との関係史は「友好」や「同盟」の関係などと表現されること以上に長期間の密接さである。この密接な関係の深層を解明することが求められる。

これまで、日本では百済を客体とする視点からその関係史が理解されてきた。同様に韓国では百済から倭国への文化の伝播に視点を集中する傾向が強いが、これもまた倭国を百済の客体として関係史を捉えているのである。相互に客体としてのみ関係史を構築した歴史像を越えた問題意識に立脚して、各国の国家形成史のなかに構造化された関係史が構想されることが期待される。百済、加耶、高句麗、新羅の相互の関係史、ひいては古代の日韓関係史を各々の国家形成史に欠くことのできない歴史として構成することである。

これまで倭国と百済や加耶との関係を文化の伝播を強調した友好や同盟という近代の外交史の概念で

把握してきた関係の実体にはその概念では把握出来ない関係がありそうである。そこから、国家が誕生する栄養素とも言うべき日韓関係史像が描き出せるのではないかと期待される。日韓の間を往来した有名な僧や博士、はたまた将軍であれ、また無名の人々であれ、その往来には国家の次元のみでは解釈しきれない渡海の意志がありそうである。

ところで、4～5世紀の日韓関係史は「広開土王碑」や『日本書紀』と『三国史記』に記録された「倭兵」は百済が派兵を要請して求めた「傭兵」であるとする説が韓国には広く理解されている。「倭兵の進出」という受け身の理解ではなく、百済の立場に視点を強く置いたこの解釈は百済の内政に固く立脚すれば必ずしも無理ではないかもしれない。しかし、倭国の立場は必ずしもそうではなかろう。「倭兵」の行動はそれ自体に目的のある進出であると見なければならず、鉄に代表される物資や文化の継続的な獲得とそのルートの保全を目的とした積極性のある派兵であるとする日本の学界に見られる理解も誤りではなかろう。

ただ、私は倭国と百済や加耶との間にはこのように両者を分離した上での一方からの「傭兵」論やまた「鉄と文化の受容と供給」という一つの方向性のみを強調してこれを読みとることとは別次元の何か両者には歴史的に形成された独特な一体感があるように思われるのである。共同研究の席上でこのように感得された倭国と百済や加耶との関係を「運命共同体」であろうと表現したところ、韓国側委員の一人から強い拒否の声が出た。私はこの声の内に近代の日韓関係が古代の关系到重なって理解されているのではないかと思った。この歴史的に形成された一体感とはなにかを自問するが、倭国の高句麗、新羅とも異なる百済や加耶との関係は単に両者が相互往来する関係史として把握する視角からは見えない歴史的な深層があるように思われてならないが、それは「日鮮同祖論」を再評価しようと言うものでは勿論ない。

この日韓関係史の研究視角を新たに試みようとして私が構想しているもうひとつの点は以下である。それは前にも述べたように、関係史がただに相手との一対一の関係で考察されることは十分ではないことは広く研究者が共通に認識するところである。この一対一関係を包む両者の多面的な関係を組み込んだ考察が欠かせないのである。この視点から既に提起された学説では、1962年に中国史家の西嶋定生が「冊封体制論」を提起している。この説は中国皇帝と周辺の諸国の王との間で結ばれた君臣の関係がそれぞれの国際関係と国内の体制を規定する、と説く東アジアの体制論である。この論に基づいた研究者による日韓関係史の研究成果が多く提出されている。

また、同年には石母田正が古代の日本は高句麗、新羅、百済、加耶から朝貢を受ける「東夷の小帝国」とする日韓関係の歴史像を提起されていた。このふたつの学説のなかの日韓の関係史像はそれまでの個別の関係史の研究成果に基づきながらもそれらを東アジア世界の歴史として構造的に理解した学説である。

このふたつの学説のなかで中国と日本に視点を置いて構造的に理解された日韓関係史像は揺るぎないに見える。そこで解釈された史料の範囲では整理された学説ではあるが、東アジアの国際関係の要に位置する古代の朝鮮半島の諸国が日本と中国の両サイドから把握されており、古代の朝鮮半島の諸国に立脚した国際関係史を新しく構想することは不可能であろうか。

これまでの古代の日韓関係史は主として日本の古代史家や中国史家によって多くの研究が提出されてきた。それが為、韓国、朝鮮の歴史学界では今日もまずこれらを批判することに勢力を注ぐに留まっていると言わざるを得ない。金錫亨の「分国論」に連なる研究は今日にも続いていると言えるが、それ

らは批判力があるとは言え、日韓の学界から十分に説得力ある説とは理解されておらず、また韓国古代史に立脚した日韓の関係史像とも必ずしも言えないのである。

また、朝鮮半島からの「渡来人」が古代日本の国家形成に果たした成果を評価する「渡来人」史観は近年注目されている百済や加耶にも倭人の「渡来人」がいたことが見られるように、この相互の移住民を国家の形成史のなかでどのように評価するかの問題にも発展して新たに考察される課題であろう。

こうしたなかで、古代東アジアのなかで今目的には「ハブの位置」にあり、かつ自らも運動する韓国古代史の視点から広く東アジアの歴史を外交の関係史に止まらず、制度や文化の比較研究をも組み入れた構造的に把握された関係史像が提示されることを期待したい。

以上、この3年間の共同研究と共同調査を終えて、この間に私の脳裏に去来した共同研究に対する感想と今後の期待を縷々述べてきた。今回、韓国側研究者は「日本の教科書」や所謂「任那日本府論」への批判を研究の視角として会に臨んでいたことは終始変わらなかったと言える。研究論文にもそのことは現れている。それはそれで韓国側の背景に沿っているが、その成果の当否は研究者の判断するところであろう。しかし、日本側委員はその二つの姿勢には立たず、あくまでこれまでの学界の研究動向とその成果に沿って、また自己のこれまでの研究を踏まえて関係史研究を進めてきた。

古代日韓関係史の研究が特定の政治環境のなかに置かれるのではなく、政治環境からは自由ななかで、日韓の共同のみならず、中国、欧米の研究者をも含んで、古代東アジアのなかで日本と韓国は国家の形成や経済、社会と文化の形成にどのように相互関係を結んできたのかを研究したいものである。